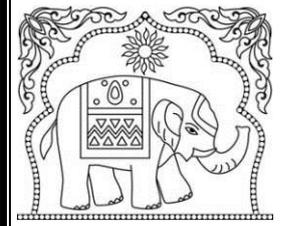


よいとりのい मैी



No.22 平成 25 年 秋号 -2013. 10. 16-
東洋大学仏教青年会・東洋大学仏教会発行機関誌

< मैी > :maitrI (マイトリー) とは、慈しみ、友情、思いやりを意味する古代インドのサンスクリット語です。
仏教では慈 (いつくしみ)・悲 (あわれみ)・喜 (よろこび)・捨 (とらわれない心) という四つの広大な利他の心 (四無量心) の一つです。

仏青夏季研修旅行報告 ～俗のうちに聖なるを見た高野山～

24 年度卒業生の鈴木伸幸さんが修行の清浄心院に宿泊でき、高野山ガイドまでして頂けるという、これとない機会を得て、南海電鉄難波に集合しました。渡辺教授、以下敬称略、福島、ウルジージャルガル、鈴木洋志、鈴木伸幸、鈴木鉄平、梅田母子そして私、田辺雅明が、今回そろってお山に。いつもながら仏青研修旅行のお天気は、雨が、いえ台風さえ、よけて下さいます。

高野山には電車でゆくのがよいです。俗世界からお山に辿り着く雰囲気、満喫出来ます。ケーブルカーは霞の中、高度を上げ高野山駅に。



清浄心院の宿坊はミシュランガイド 5 つ星の噂の通り素敵です。伝統・清潔・和の心を求めるフランスの旅人が、集まっているのが納得です。伸幸さんの計らいで、お山で最高の精進料理と宿泊場所が用意されておりました。京都二条城、将軍拝謁の間と見まがうばかりの広間での食事は驚きでした。金色のお部屋で重要文化財なみの調度に囲まれてなのです。以前個人で行った、旅行会社企画ツアーの宿坊体験の貧相なイメージで高野山を見た事は誤りでした。

次の朝、勤行は、正式な長さで本当に荘厳でした。高野山でお寺のご本尊が弘法大師様なのは、清浄心院

だけだそうです。そのご本尊二十日大師様 (入滅前二十日間でお姿を作った) の拝顔はかなわないものの、特別に灌頂堂の阿弥陀様、護摩堂の不動明王様、その他普通では見られない所を解説付で案内してもらえました。

弘法大師が、今も存命し続け私たちをお導き下さりながら祀られているという奥院に通ずる参道の両脇には、今回お世話になった清浄心院の檀家筆頭である上杉謙信の霊廟を始めとして武田信玄の墓所など敵味方を問わずに並んでいます。ここに墓所あらねば戦国武将にあらずの感じ。そんな中、渡辺先生が、雪山道人慧海師供養塔の石塔を見つけられ、東洋大学にゆかりのチベット仏教学者でもある河口慧海に、参加者一同黙禱を奉げました。まさにお導きと言えましょう。

午後は総本山の金剛峯寺に。新別殿でお茶とお菓子の接待は、疲れ果てていた一同に救いの一服でした。力を得て根本大塔とその周辺を巡り 6 日の研修は終了。その夜の懇親会では、伸幸さんの高野山秘話も伺え、まさに俗のうえに聖があり、高貴珠玉な蓮の花は泥中から咲くことを、話しではありますが実感させられました。



く原堯栄師（1890–1965 真言の学僧、金剛峯寺座主、著作『邪教立川流の研究』）の隠居所であった別棟に宿泊。朝の勤行は溢れんばかりの大人数でした。金剛三昧院の国宝多宝塔へ。さらに素晴らしく空いている霊宝館では運慶作八大童子を堪能。まさに国宝三昧の研修でした。

ぜひ、今回参加できなかった皆さまも、今度はぜひご一緒いたしましょう！

この東洋大学仏教教会でしか得られない出来事が待っております。

田辺雅明（仏教会会員）

【目次】			
夏季研修旅行報告	……1	高野山での修行生活	……2
日本印度学仏教学会参加報告	……3	倉田百三と西田幾多郎④	……4
編集者の哲学備忘録①	……4	タイの仏教事情⑩	……5
コラム「日本文化と仏教」⑳	……7	書籍・イベント情報	……9
今後の予定	……10		

高野山での修行生活

おかげさまでこの3月に大学を卒業することができました。その後、4月13日から7月3日まで高野山の清浄心院道場、7月4日から栃木県鹿沼市の寶性寺道場で四度加行を修し、7月25日の日中行をもって無事に成満しました。



3月の前行から始まって結願にいたるまで、長い長いトンネルをくぐってきたようです。かつて台湾の法師さんから、人が生まれる時と死にゆく時は同じで、暗い所を歩いて明るい所に出ていくとのお話を伺ったことがあります。まさに行の世界も同じなのでしょう。修行が終わったその瞬間、何かを成し遂げたという達成感よりも、新たな視界がぱっと開けたような爽快な感覚があったことを鮮明に覚えています。

四度加行は、伝法灌頂を授かるための前行とされ、真言宗の僧侶として必須の行です。それは、「十八道」「金剛界」「胎藏界」「護摩」の四つの行法次第から成ります。それぞれの行法は二週間の「加行」と一週間の「正行」に分けられます。それに四度加行の前行である理趣経加行と護身法加行を加えると、すべての修法を終えるのに合計で100日程度かかります（高野山中院流の場合）。

護摩「加行」までの一日は、早朝3時20分に起床して、その日の行法で使用する閻伽水の汲み取りから始まります。午前4時から後夜の行法に入り、6時から朝勤行に参加します。勤行が終わると院内すべてのお堂と鎮守にお参りし、その後食事作法を修して粥食をいただきます。午前8時から日中行が始まります。高野山の伝統ではこの日中の行法に続けて、大師・明神の供養の座を勤めることになっていて、それが終わるのが10時40分ごろです。そしてすぐに壇上伽藍の参拝に向かいます。さらに3日に一度は奥の院参拝も加わります。この両壇参拝の日は体力の消耗も激しく、なかなか体に応えます。ただし正行の期間に入ると、新しい修法を身につけるために禁足になり、伽藍参拝は免除されます。伽藍参拝から戻ると、再び食事作法を修して飯食をいただきます。午

Click Here to upgrade to
Unlimited Pages and Expanded Features

のお勤めをして、「薬石」をいただき、最後に施餓鬼の供養を行つると、いよいよ不動明王を本尊にして護摩の修法を勤めます。しかし一回の修法に3時間近くかかり、準備と後片付けに多くの時間を要することから、後夜の行を午前2時から始めて、全体的に時間を前倒しにして一日を過ごします。

加行中は、大学で仏教学を学ぶご縁に恵まれて本当に幸せだったと身にしみて感じていました。四度加行の行法次第には初心の行であるとはいえ、「諸法本不生」や「自性清浄」「転識得智」など大乘仏教由来の難解な概念が数多く出てきます。それらの意味を漠然とではあれ、学校で学んだ知識が助けになって一応の理解を得た上で実践できたことは大きな喜びです。

とは言っても、これで真言宗僧侶としてのスタートに立てたに過ぎません。これから長い時間をかけて学ぶべきことが多くあることは、以前よりもより強く実感しています。ですので、今後またゆまずより一層精進したいと思います。在学中ならびに修行でお世話になった先生方や皆さんにはこの場で御礼申し上げます。ありがとうございました。

鈴木伸幸（仏教会会員）

日本印度学仏教学会参加報告

2013年8月31日～9月1日、日本印度学仏教学会第64回学術大会が島根県松江市の島根県民会館で開催されました。本年は東京大学名誉教授、(財)中村元東方研究所創設者である故中村元先生の生誕百周年という記念すべき年にあたり、先生の生誕地松江市が開催地に選ばれました。本年度の学術大会では10部会(パネル発表を除く)約250名の研究者による学術発表が行われました。本学からは伊吹敦先生、沼田一郎先生、渡辺章悟先生の御三名による御発表があり、また研究員及び大学院在學生による発表は現銀谷史明氏(東洋学研究所客員研究員)、中村玲太氏(博士課程後期)によるものであります。私(ウルジー・ジャルガル)も発表者の末席に連ならせて頂きました。



各部会で行われた学術発表の内容は概ね次の通りです。第一部会ではインド学を中心に六派哲学、ヴェーダ、叙事詩・サンスクリット古典文学等に関する学術発表が行われ、本学からは沼田一郎先生による御発表(「ダルマ文献における「寄託」規定」)がありました。第二部会では初期仏教、ジャイナ教、東南アジアのパーリ文献に関する学術発表が行われました。第三部会はアビダルマ、認識論、般若経類を中心とする大乘経典に関する学術発表で、本学からは渡辺章悟先生による御発表(「般若経の三乗における菩薩乗の意味」)がありました。第四部会では中観、唯識思想に関する学術成果が発表され、若輩ながら私が発表させて頂きました(『金光明経』における空性について)。第五部会は華嚴経、阿弥陀経類を中心とする大乘経典類及びチベット仏教に関する研究発表で、本学の関係者の発表者は現銀谷史明氏、吉崎一美氏の二名でした。第六、第七、第八、第九部会は天台、真言、曹洞、日蓮教学、真宗学を中心とした学術発表で、第七部会ではOBの土倉宏氏、第九部会では中村玲太氏による発表がありました。特別部会及び第十部会では古代～近代日本史と仏教との関係を扱った学術発表が行われ、本学からは伊吹敦先生が御発表(「聖徳太子慧思後身説の誕



[Click Here to upgrade to
Unlimited Pages and Expanded Features](#)

における〈存在〉をめぐる議論の諸相」、「インド学仏教学におけるデジタ
教」、「儒仏道三教交渉研究の新

展開」という四つのテーマでパネル発表が行われました。

学会初日には会員総会が行われ、冒頭に渡辺章悟先生の開会挨拶がありました。次いで懇親会が開かれ、溝口善兵衛島根県知事、松浦正敬松江市長、前田専學(財)東方研究会理事長による御挨拶の後、懇親の宴が盛大に催されました。また9月2日にはエクスカージョンが行われました。台風の影響による生憎の天候で、参加希望者数が当初少なかったために中止が危惧されましたが、予定通り行われることになり松江城、中村元記念館を訪問の後、出雲大社を参詣しました。尚、本年度の総会において来年度の学術大会は東京・武蔵野大学で開催されることが決定しました。本学のインド学仏教学研究の益々の発展を願って止みません。

ウルジーヤルガル(東洋大学大学院博士後期課程、仏教青年会会長)



倉田百三と西田幾多郎 ④

倉田百三は西田幾多郎『善の研究』について、一高時代の論文「生命の認識的努力」において以下のように評している。

[倉田]「氏(筆者注 西田幾多郎)にとりてはもともと精神と自然と二の實在があるのではない。両者はただちに唯一實在である。その實在の統一力が神である。自己の本然的要求は神の意志と一致するのである。」(『愛と認識との出発』「生命の認識的努力」)

主観である「精神」と、客観である「自然」とは決して別個の存在ではない。両者の背後には同じ「統一力」が存在し、人は自らの雑念を減らすことによって、自らの根柢にある「統一力」と融合することができる。そしてこの「統一力」こそが「真の自己」であり、いわゆる「神」である。

『善の研究』をこのように解釈した倉田は、自らが陥っていた独我論から抜け出すきっかけを掴み、感動のあまり涙を流した。しかし、倉田が感銘を受けたのは『善の研究』の学術的な面だけではない。「生命の認識的努力」最終章において、倉田は自らの哲学に対する態度について次のように述べている。



[倉田]「私らは哲学の批評に関して芸術的態度をとりたい。人を離れて普遍的にただその体系が示す思想だけを見たくない。興味の重点をその体系がいかに真理を語るかという点にのみおかずして、その思想の背後に潜む学者の人格の上にすえつけたい。」(『愛と認識との出発』「生命の認識的努力」)

『善の研究』が出版されたのは明治44年(1911)のことであるが、その多くは西田が郷里金沢の第四高等学校にて教鞭をとっていた頃(1899-1909)に書かれたものであった。後に西田は四高での10年間を、「心身共に壮んな、人生の最もよき時であった。」(『或教授の退職の辞』)と回顧しているが、この頃の日記には自らの学問に取り組む目的が以下のように綴られている。

[西田]「学問は畢竟 Life の為なり、Life が第一等の事なり、Life なき学問は無用なり」(1902/2/24 日記)

成分を分析したるもあれども、パンや水の味をとく者なし」(1902/10/27 鈴木大拙宛書簡)と批判するなど、単なる学術的興味からではなく、自らの「生」の問題として研究に没頭した。そしてこの姿勢は、当時熱心に取り組んでいた坐禅に対しても同様であった。

[西田]「余は禅を学の為になすは誤なり。余が心の為め生命の為になすべし。(中略)怠慢一事をなさずして(中略)幾年を経遍するも何の功あらん」(1903/7/23 日記)

この時期西田は、父との不仲や弟の戦死など、人生における様々な不調和を経験している。『善の研究』はそのような時期に少しずつ書きためられたものであり、それゆえ同書は単なる学術書というよりは寧ろ西田自身の「生」に対する思索の集大成といった内容になっている。

『善の研究』を読んだ倉田は、自らの人生の問題として学問に取り組む西田の姿をその中に見出した。そして、西田自身の人格が論理の形をとって表現された「芸術品」として、『善の研究』を評価したのである。

山口修三 (仏教会会員)

編集者の哲学的備忘録①

どうやら今年は、観阿弥生誕 680 年、世阿弥生誕 650 年という記念すべき年のようなものである。ただ私事だが、実は私は人生で 2 回しか能楽を鑑賞したことがない。そのうちの人生初の能楽鑑賞は、ほとんどと言っていいほど記憶が無い。それは、確か 7 年ほど前のことであったが、恥ずかしながら、その当時の私は能楽などのいわゆる伝統文化といったものに興味が湧いていなかったようで、鑑賞途中で眠ってしまったのだろう。故に、その時の鑑賞に関する記憶が非常に薄いものとなっている。

そしてつい先日、私は東洋大学内にて人生で 2 度目となる能楽鑑賞の機会を得て、今回はしっかりとライブでの能楽を堪能したのであった。そこで演じられたのは、世阿弥の作品である「清経」で、その内容は、平家が都落ちした後の話で、平清経が戦場にて自ら入水し、そのことが都でひっそりと暮らしていた清経の妻に伝えられる…という所から始まるもので、所々に仏教的な香りがする作品なので、読者の皆様もご鑑賞の機会がありましたら、是非どうぞ。

では、何故約 7 年の時を経て、私はまた能楽鑑賞に参加したのであろうか。正直に言ってしまうと、私の履修している授業の一環で、半ば強制的に能楽鑑賞に参加したのだが、ただ、7 年前と比べると、能楽への興味は断然高まっていた。それは、やはり昨年よりインド哲学科にて、仏教学の扉を叩き始めたことにも関係しているが、他大学に在籍している私の友人が、昨年より能楽の稽古を始め、その話を聞いていたことが大きい。

今回から不定期でお送りする私の記事では、私とその能楽鑑賞にて感じたことと、私がたまに哲学の真似事として考えてきたことを結び付け、不特定多数の読者の皆様にお届けするという試みである。ただ、ある意味で、この試みは私の恥部を曝け出して皆様にお届けするとも言えるので、大変見苦しいものだと思いますが、ここはどうか浅学の私が成長する機会のひとつとして、温かく見守っていただきたいと思います。

鈴木鉄平 (文学部インド哲学科 2 年)

タイの仏教事情⑩

—タイの寺院 (5) —

前号の続きとして、タイの寺院について紹介したいと思います。

る壁がない吹き抜けの建物です。サーラーラーイは、お寺に来る人が休憩したり、お供え物などをして功德を施したりする場所です。

サーラープルアングルアン（王様のお召しがえ所）

王様のお召しがえ所は、ワットスタット、ワットボウオン、ワットラーチャボーピットなどの重要な寺院だけにあります。この建物は、たいてい寺院の前にある塀のすぐ近くに建てられます。王様は、そこで功德を積むための服にお着替えになるのです。

書庫

書庫は、経典が納められているお堂です。木で造られた書庫は、経典が虫に食われたりしないように池の上に建てられます。王室寺院の書庫は、時々素晴らしいモンドップ型で造られます。（モンドップは、仏像や仏足跡や経典などを安置するための四角い建物です。屋根は重なって中央がとがっています）

仏塔

タイの仏塔には、ストゥープチェーディーとプラーンの2種類があります。仏塔は、寺院の仏様の地域にあり、その中にはお釈迦様の遺骨が納めてあるとされています。また、寺院によっては、仏典や小さな仏像や遺骨が納めてあるものもあります。

ストゥープチェーディー

ストゥープチェーディーという言葉は、サンスクリット語の *Stupa*（ストゥーパ、仏塔）とパーリ語の *Cetiya*（塔廟）から由来するものです。しかし、現在では、ストゥーパの形をしながらも、タイの人たちは、「チェーディー」のみと呼んでいる場合がほとんどです。インドのアショーク王が仏舎利をあちらこちらに分けましたが、その仏舎利を納めるために仏塔を建てるようになりました。



仏塔は、インドやスリランカを通じてタイにも伝えられ、その形も次第にタイ独自のもの（チェーディー）になっていきました。チェーディーの上部は、天に向かってとがっており、中央部はつり鐘のような型をしています。下部は、ほとんどが円形か四角形になっていますが、八角形をしたものもあります。チェーディーには、次の3つ基本の型があります。それは、つり鐘型（スリランカ型ともいいます。）、12本すみ取り型、四角の高い台の上につり鐘型の仏塔がのっている型です。

チェーディーのそれぞれの部分は、すべて仏教にまつわる事柄を表しています。例えば、

一番先の丸い玉のようなものは、涅槃を表し、一番下の基台は世界を表しています。

プラーン

プラーンというのは、もともとヒンドゥー教の神殿ですが、仏教徒は、この型を寺院に取り入れました。プラーンはたいてい、れんがやラテライト（紅土）という鉄分を含んだ赤土を固めたもので造られ、とうもろこしのような形をしています。塔の先にシヴァ神を表す印がついています。プラーンは、お寺の中心にあり、仏舎利を納めてある場所とされる場合もあります。

（この記事は、チュラーロンコーン大学成人教育センターにより出版した「タイ文化の魅力 歴史 美術 建築 他 観光ガイドの手引き」pp. 92-94 を参考にして執筆したものです。）

プラマハチャップン (Phramah chatpong Katapuñño 仏教会会員、東洋大学東洋学研究所奨励研究員)

兼好法師が『徒然草』で伝えたかったこと

仏教会会員 作家 永田道子

「つれづれなるままに、日くらし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば」の書き出しで知られる『徒然草』だが、作者の卜部兼好（うらべかねよし。けんこうは出家後の法名。吉田は後世そう呼ばれるようになった）は、正確な生没年も出自も不明という謎めいた人物である。京都で生まれ育ったというのが定説だが、鎌倉幕府の執権北条氏の支族である金沢（かねさわ）氏の家臣の子で、現在の横浜で生まれ育ち、その後上京して撰閑家の九条家に仕えたという説もある。

では、本書がいつ頃、なんのために書かれたのかといえば、第1段から第32段までの（第37段という説もある）、全243段の六分の一ほどは、文保二年（1318）か元応元年（1319）頃からの一年ほどで執筆して中断、十数年してから再開して最後まで完成させ、最後に冒頭の序段をつけ加えたというのが真相らしい。

最初の執筆当時、九条家の若き当主である具親（ともちか）は後醍醐天皇の寵姫を盗み出して逆鱗に触れ、洛北の山荘に蟄居させられていた。つきそっていた家司兼家庭教師の兼好としては、色事の不始末で追われてお先真っ暗、恋の痛手もあって悄然としているお坊ちやまの無聊（ぶりょう）を慰めつつ、大いに反省をうながす必要があった。兼好は当時三十代半ばか四十歳位。具親は二十代半ば。彼に読み聞かせるために書き始めたというのである。「つれづれなるまま」どころか、教訓、お説教である。

兼好はその頃すでに、比叡山の横川に登って三年ほど修行したのち出家していた。人並み以上に宮廷での出世を望んでいたのに夢破れ、半分は拗ねてであろうが沙弥になったのだ。だから、世俗を離れて修行一途というわけではなく、鎌倉幕府につてがあるため九条家や公卿方に重宝がられ、双方の仲介と折衝役をするようになっていった。現代でいえばロビイストである。彼自身、好奇心旺盛でなんにでも首を突っ込みたがり、よくいえば、ものごとをクールに客観的な視点で見ようとするジャーナリスト気質だった。おまけに皮肉屋で毒舌家。『徒然草』がしばしば、「随筆といえるようなしろものではない。ましてや文学作品などではない」といわれるのは、そんな通俗性、人々の価値観の変化に対する嗅覚、目線の低さによるものである。だが、その分、その時代の「ナマの声」「生きた証言」の面白さがある。彼はまた、いろいろな歌会にせっせと顔を出し、古典をよく読み、宮廷の有職故実にも詳しかった。美意識もなかなかするどく、『枕草子』ばりの王朝美学賞賛もあるし、「花はさかりに、月はくまなきをのみ、見るものかは」（第137段）という感覚は、半世紀ほど後の世阿弥に先んじるものがある。『徒然草』が兼好の没後、百年ほどして発見され、江戸時代初期には発行部数約1000部の大ベストセラーになったのはそれゆえであり、けっして仏道啓蒙書や「隠遁者の内省的なつぶやき」としてではなかった。しかしながら、仏教がらみの説話も、彼独特のうがったひねりと独断がきいていて、いまでもそういう目で読めば実におもしろいコラムが満載なのだ。そのうちいくつかを紹介しよう。（筆者が現代語に訳した）

ある大金持ち曰く、「人は、万事をさしおいて、ただ一途に富を獲得すべきである。貧しくては生きる甲斐なし。富める者だけが人間といえるのだ。富を得ようと思うなら、まずはその心持ちを修行すべし。その心とは他でもない、この世の中は永久不変だという考えを堅持し、仮にも無常を観じてはならぬ。これが第一の心がけである。次に、すべての用事をしようと思うな。この世に生きていくのに、自分のことであれ他人のことであれ、したいことは無限である。欲に随って志を遂げようと思えば、たとえ百万の銭があっても、すぐに手元から出ていってしまう。人間の願望はやむ時なし。財は尽きる期あり。限りある財を以て限りなき願いを満たそうとすること自体が不可能なのだ。欲望が起りかけたら、身を滅ぼす悪念がやってきたとかたく慎み恐れて、わずかの出費もするな。（中略） 金銭を恐れ敬い、節約で恥をかいても恨んだり怒ったりせず、正直にして、人との約束は厳守せよ。この義を守れば、火が乾いたところにつき、水が低きに流れるがごとく、富はむこうからやってくる。銭が貯まって尽きぬときには、酒・美食・女色に耽溺したり、住居を飾りたてたりせず、欲望を満たすことがなくとも、心はいつまでもやすらかで楽しいものだ」と。

を求めるのである。金を財とするのはそれが願いをかなえてくれ
銭があるのに用いないのでは、まったく貧者とおなじである。そ
れでは何を楽しみとするのか。この教訓はただ、世間的な欲望を断ち切り、貧乏を嘆いてはならぬという意
味だと私は解釈する。欲望を満足させて楽しみとするよりは、財がないほうがましであろう。たちの悪いデ
キモノを患っている者が、患部を水で洗って気持ちよいく感じよりは、病まぬほうがましであろう。所願
があっても満たさず、金があっても使わないというにいたっては、貧者も大金持ちもその境地に違いはない
ということで、究竟は理即とひとしく、大欲は無欲に似るのである。(第 217 段)

明日は遠国へ旅立とうとする人に向かって、心静かにしなければならないようなことを話しかけるであろ
うか。さし迫った大事な用件を処理し、切実に深く嘆くことがある人は他のことなど聞き入れられない。他
人の愁いや喜びを見舞うこともできないものである。しかしだからといって、それを恨む人はいない。しか
らば、歳をとって盛りを過ぎた人や、病んでいる人、ましてや出家遁世している人もそれとおなじである。

世間の儀礼的な行事は、どれ一つとして、せざるに済ませられるものはない。無視できぬまま慣習どおりに
必ず行わなければならないなどと考えていたら、願いも多く、身も苦しく、心の余裕もないまま、一生は雑
事の些細な用事に邪魔されて空しく終わってしまうであろう。日暮れて塗(みち)遠し。わが人生はすでに、
つまずいてばかりで、思うように進めずきってしまった。(いまこそ)諸縁を放下すべき時だ。信(人を欺か
ず偽らないこと)をも守らぬ。礼儀をも思わぬ。この気持を理解できぬやつは、物狂いとでも言え。正気
でないとでも人情がないとでも思え。悪く言われても苦にすまい。褒められても聞き入れたりしないぞ。(第 112
段)

蟻のごとく集まり、東西に急ぎ、南北に走る。身分の高い者も低い者も、老いた者も若者もだ。行く所が
あり、帰る家がある。夕べに寝て、朝には起きる。こんなふうには世間の人々が皆、せっせと努めているのは
いったい何事か。長生きしたいと願い、利を求めて止む時がない。身を大事に養生して、先に何を期待して
待っているのか。確実なのは、ただ老いと死だけではないか。それが来るのは速やかで、一瞬の間もとどま
ってはくれぬ。それを待っている間、なんの楽しみがあろうか。

迷っている者はこの老いと死を恐れぬ。名利におぼれて、先途の近いことをかえりみないからである。
また、愚かな人は悲しむ。常住と思ひ込んで変化の理を知らぬからである。(第 74 段)

ただ独りでいて何もすることがないのをつらく思う人は、いかなる心であろうか。心が他のことにまぎれ
ることなく、独りでいられることだけがよいというのに。世間にしたがえば心は外の塵(六塵)にとらわれ
て惑いやすく、人と交われば、言葉は他人の耳に逆らわないようにと自分の本心とは違うことを言ってしまう。
人に戯れ、争い、あるときは恨み、あるときは喜ぶ。そうした心の動きは定まることがない。世俗の思
慮分別がみだりに起こり、損得勘定のやむときがない。惑いの上に酔い、酔いの中に夢を見ているようなも
のだ。せわしく走ったあげく疲れきり、ぼんやりして失念する、人みな是の如しである。いまだ誠の道(真
の仏道)を知らなくても、縁を離れて身を閑(しず)かにし、世事に関係しないで心を安くすることこそ、一
時的にせよ生を楽しむことと言えらるであろう。「生活(しょうかつ)・人事(にんじ)・技能・学問の諸縁を止めよ」
とこそ、摩訶止観にもある。(第 75 段)

極めつけは最後の第 243 段、文章の雰囲気を楽しんでいただきたいので、原文で。

八つになりし年、父に問ひていはく、「仏はいかなるものにか候ふらん」といふ。父がいはく、「仏には人
が成りたるなり」と。また問ふ、「人は何として仏には成り候ふやらん」と。父また、「仏の教へによりて成
るなり」と答ふ。また問ふ、「教へ候ひける仏をば、何が教へ候ひける」と。また答ふ、「それもまた、先の
仏の教へによりて成り給ふなり」と。また問ふ、「その教へはじめ候ひける第一の仏は、いかなる仏にか候ひ
ける」といふ時、父、「空よりや降りけん、土よりや湧きけん」といひて笑ふ。「問ひつめられて、え答へず
なり侍りつ」と諸人に語りて興じき。



《書籍》

- ・『「アビダンマッタサンガハ」を読む』

藤本晃 / 訳 (サンガ 4500円)

アルボムツレ・スマナサーラ長老がアビダンマを詳細に解説した『ブッダの実践心理学』シリーズ(サンガ刊)。その全八巻に掲載されてきた『アビダンマッタサンガハ』全文を、『ブッダの実践心理学』の共著者である藤本晃氏が、あらためて一冊の日本語訳まとめたもので、総合的に理解するための解説も加えてある。アビダンマを多角的に理解し、その全体像を把握するために最適な一冊。

- ・『初期密教 思想・信仰・文化』

高橋尚夫・木村秀明・野口圭也・大塚伸夫 / 編 (春秋社 4200円)

『大日経』『金剛頂経』等の「純密」(純粹な密教)に対して「雑密」(雑部密教)と呼ばれ、これまであまり研究が進んでいなかった初期密教を、「主要経典」「陀羅尼・真言」「図像・美術」「修法・信仰」の四つの面から、また地域ではインドから日本まで、幅広く総合的に解説する。執筆陣は碩学と新進気鋭の研究者 22名。

- ・『日本仏教の医療史』

新村拓 / 著 (法政大学出版会 3300円)

病に苦しみ、死苦に脅える人びとに対して、日本仏教はいかに関わってきたのか。自然科学をベースとする医学を仏教はどのように取り込み、苦痛の解消に役立ててきたのか。仏教の病因論と治方論、祈禱と医療の交錯、僧医の系譜、薬種の栽培と製薬、天皇の治療・看取りから癩者(ハンセン病患者)へのまなざしまで、歴大な文献を渉猟し、絵巻に見る病の図像を参照しつつその歴史を克明に跡づける。

- ・『増補改訂 密教占星術—宿曜道とインド占星術』

矢野道雄 / 著 (東洋書院 2800円)

弘法大師空海によって、日本にもたらされたインド起源の占星術。天と人間の関係を求めた古代の学問。藤原道長も用いていた宿曜道、そして星供養などで現在にも生き続ける密教占星術の源流を探る。

- ・『捨ててこそ空也』

梓澤要 / 著 (新潮社 2100円)

法然・親鸞より 200年前の平安時代中期、念仏を庶民に説いて歩き、「市の聖」「念仏上人」と崇められた浄土思想の先駆者・空也の鮮烈な生涯を描いた、初の歴史小説。この「まいとりい」に連載「日本文化と仏教」をご寄稿してくださっている永田道子さんの新刊。

《イベント》

- ・特別展「東大寺—鎌倉再建と華嚴興隆—」

東大寺は天平時代に創建され、諸宗兼学の寺院として日本仏教で重要な位置を占めてきました。本特別展では、治承四年の南都焼討以降の再建事業や、華嚴学の興隆を中心とする、鎌倉時代における東大寺の意義を考えます。金沢文庫が収蔵する称名寺聖教(重要文化財)にも、東大寺の鎌倉再建に関する貴重な資料が多く含まれており、近年、東大寺別当もつとめた弁曉上人の著作『尊勝院弁曉説草』がまとまって発見されました。鎌倉再建期の東大寺の至宝を中心に、初公開を含む金沢文庫の東大寺関係の収蔵品を含めてご紹介します。

日時：10/11(金)～12/1(日) 午前9時～午後4時30分(入館は4時まで)

観覧料：成人 800円 20歳未満の学生 600円 65歳以上及び高校生 100円

会場：中世歴史博物館 神奈川県立金沢文庫(京浜急行「金沢文庫」駅より徒歩12分)



の予定 ～

《行事》

琵琶演奏会

開催日：平成 25 年 12 月 25 日（水）

15 時開場、15 時 30 分開演（入場無料）

場所：（公財）仏教伝道協会

仏教伝道センタービル 8F「和の間」

〒108-0014 東京都港区芝 4 丁目 3-14

JR 田町駅 三田口（西口）より徒歩 8 分、都営地下鉄

三田線、都営地下鉄浅草線 三田駅 A9 番出口より徒

歩 2 分（駐車場はありません）

平成 25 年度仏教会・仏教青年会忘年会

開催日：平成 25 年 12 月 25 日（水）

18 時開始予定

場所：（公財）仏教伝道協会 仏教伝道センタービル 2F

レストラン菩提樹

〒108-0014 東京都港区芝 4 丁目 3-14

JR 田町駅 三田口（西口）より徒歩 8 分、都営地下鉄

三田線、都営地下鉄浅草線 三田駅 A9 番出口より徒

歩 2 分（駐車場はありません）

費用：仏教会・仏教青年会ともに 3,000 円

いずれのイベントも詳細は東洋大学仏教青年会のホーム

ページ<<http://www.toyo-yimba.org/>>でご確認ください。

※随時会員を受け付けています。入会希望者は下記までご連絡下さい。会員規約・活動内容・受付手続きなどの詳細はホームページ<<http://www.toyo-yimba.org/>>をご覧ください。また、紹介したい行事や掲載したい記事などがございましたら、下記のアドレスまでご一報下さい。

編集後記

今号より編集責任者となりました、鈴木鉄平です。初の編集作業で不慣れなところが多々あり、非常に苦しみましたが、どうかこうにか印刷まで辿り着きました。関係者の皆様には、様々な迷惑をおかけして申し訳ございませんでした。また、今回忙しい中ご寄稿して下さった著者の皆様、そして前任者の鈴木洋志さんも、紙面上ではございますが、ご協力感謝申し上げます。そして、次号より私の都合上、この「まいとりの」をリニューアルさせていただきます。

編集責任者：鈴木鉄平（インド哲学科 2 年）

《語学勉強会》

※勉強会についてのお問い合わせは下記の連絡先をお願いいたします。（会員は無料で参加できます。）

○仏教漢文講読会

講師：佐藤厚

日時：隔週土曜 4 限

内容：「懺悔文」、「般若心経」など、よく知られた偈文や経典類などを材料に漢文および思想の解説をします。読誦や歌にも力を入れて身に付く講義を目指します。参加希望者は佐藤<sato_inbuds@yahoo.co.jp>までご連絡ください。

○サンスクリット文献勉強会

講師：出野尚紀

日時：隔週金曜 6 限

内容：『アヴァダーナ』を読みます。初心者大歓迎です。参加希望者は鈴木<li1000041@toyo.jp>までご連絡下さい。

○チベット文献講読会

講師：石川美恵

日時：隔週月曜 18：30～20：00

会場：6 号館 4 階 6408 教室

内容：ツォンカパの『ラムリム』『菩提心の儀軌』の章を読みます。チベット語初心者も歓迎です。参加希望者は石川<danakoshajp@yahoo.co.jp>までご連絡下さい。

東洋大学仏教会

卒業生、一般：年会費 3000 円、特別賛助一口 5000 円

東洋大学仏教会事務局長 岩井昌悟

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

東洋大学インド哲学科第 8 研究室気付

Tel: 03-3945-7393(-7357) E-mail: tba.bussei@gmail.com

東洋大学仏教青年会

学生：年会費 1000 円

東洋大学仏教青年会会長

ウルジージャルガル

db0900044@toyo.jp

URL: <http://www.toyo-yimba.org>